

# 大いなる福音

ゆうすけ

眠れない・・・。

ハイウィンドの個室、俺はベットの上じっと金属板の天井を見つめていた。

情けない話だが、俺は復活以来連日寝不足だ。その理由というのもこの揺れる機体のせいだ。

このごろハイウィンドの中で寝泊まりする生活が続いている。

一般に酔うと眠くなるとか、眠ると酔いが直るとか言われるが、俺はどうも揺れが気になって眠れない。

自分がソルジャーだと思っていたときは、何処だって、どんな状況だって眠れたのに。

実際の俺は神経質で気が小さい男なんだな。

俺は寝返りを打った。

丸形の窓から、瞬く数多の星たちと、血のように真っ赤なメテオが覗く・・・。

メテオ・・・。

クロマテリア・・・。

セフィロス・・・。

俺・・・。

そして、エアリス。

嫌でも様々な思いが頭に浮かぶ。

時間は俺に思考させる。

エアリスは俺に何かを与えてくれた。

彼女は俺にとって何だったんだろう？

古代種、いや、そんなものじゃない！

仲間、そうだけど違う！

恋人・・・。

まてよ・・・、恋人。

そう、エアリスは俺をどう思っていたんだ？

恋人・・・？

エアリスは結局俺の中にザックスをお求めていただけなんだ。

俺はザックスになったつもりになっていただけだ。

俺はザックスじゃない。

じゃあ、エアリスは偽りの俺が好きだったのか。

ソルジャーでも何でもない今の俺は・・・、ただの仲間か？

考えていてもつらいだけだ・・・。

動こう・・・。

風に当たりにいこう・・・。

俺は壁に立てかけて置いた、バスターソードを手にする。

ザックスの形見の剣だ・・・。

デッキには誰もいない。

あえて、いると言えば俺だけだ。

満天の星空の下。

俺は素振りを始めた。

気持ち悪いと言えば気持ち悪いが、考えて辛い思いをするよりかはました。

「クラウド・・・？」

ティファの声が聞こえた。

デッキへの出口の所にティファがいる。

「どうした？」

俺はいつものポーズでティファを迎えた。

彼女は俺を見て吹き出して笑う。

「なにがそんなに可らしい？」

「クラウドがクラウドしているから」

なんだか・・・。

俺は悩みのポーズをとった。

するとまた笑うティファ。

「どうしたの、珍しいわね」

俺の隣に立つティファ。

大して身長は変わらないんだな、俺たちは。

少し前まで俺の方が小さかった気がする。

「眠れないからだ」

「ふうーん。クラウドって夜がたっばいよね」

ああ、そうかもしれない。

「さあ」

デッキの手すりにもたれると、ティファも俺のとなりで同じようにもたれる。

「無愛想なところがクラウドだね」

ティファは俺が復活してから、俺が俺らしい仕草をする度に、喜んでいるような気がする。

「どうだか」

しばらくの沈黙・・・。

れは目を細めてじっと遠くに浮かぶメテオを眺めた。

ティファはと言うと、じっと俺を眺めていた。

「どうした？」

俺が聞くと・・・。

「クラウドって何を考えているのかなって」

「さあな」

俺自身も考えたことはない。

俺はいつものポーズを取った。

「クラウドっていつも、何か考え込んでいるみたい」

そうでもない。

「私ね、ソルジャーじゃなくっても、クラウドはクラウドだなんて思った」  
？

俺はティファを見つめた。

「私、エアリスの気持ちが解るな」

エアリスの気持ち・・・、ザックスが好きな気持ちか？

「エアリスがクラウドを好きだった気持ち」

エアリスが俺を？

馬鹿な。

「たしかにエアリスは偽りのソルジャーのクラウドしか知らないと思う。

でもね、エアリスはクラウドをソルジャー、ザックスの代わりとしては見てなかったよ。

代わりじゃダメなのよ。

そんな生半可な気持ちじゃ好きになれないの」

.....

「エアリスが好きだったのはあなた自身なのよ」

俺は頭をかいた。

そして、星空を見上げる。

そうか、そうだったのか、エアリスがくれたもの。

エアリスは偽らなくても良い本当の俺を認めてくれていた。

だから、俺は彼女の前では、心を開いて本当の自分でいられたんだ。

ありがとう、エアリス。

「ティファ、もう寝よう」

「あしたも忙しいからね」